

第9回神楽公演を見て

埼玉県在住 T. K. 生

第9回の神楽公演の大成功、おめでとうございます。私は仕事の都合で夕公演にしか参加できませんでしたが、9回目という回数の持つ意味を今さらながらに感じた公演でした。もともと、9回目と銘打ってはいるものの、平成20年(2008)以来、昨年の国際交流基金・日本語国際センターで研修されていた海外の日本語の先生方を対象とした公演、何年か前の慶応大学における公演を数えれば、公演活動としては11回目を迎えたということになります。その間、毎年複数の大学から学生が集まって実行委員会を結成し、出演団体の方々はもちろんですが、シニアスタッフや写真・ビデオ撮影スタッフをはじめ、さまざまな方々に支えられながら、この催しが継続されてきました。私は可能な限り、毎年公演を見るようにしてきましたが、資金的にも人員的にも大変厳しい状況の中で、このような公演が続けられてきたこと、そして今年もまたこの公演が行われたことに、まずは心からお祝いの言葉を捧げたいと思います。

公演終了後、今回はこれまでの公演の中で最も多い観客数を記録したと聞きました。また、国際交流基金・日本語国際センターのご配慮で、海外から研修のため来日された日本語教育に携わる先生方が公費で観覧されたほか、旅行会社が公演見学のツアーを企画してくださるなどの新たな動きもあったと伺いました。これまでの蓄積を背景に、こうした新しい動きが出てきたことも、この公演が社会的に十分認知されてきたことの証左といえると思います。

さて、今回の公演ですが、これまでとは違い、出演団体を埼玉県内ではなく、神奈川県・厚木市からお招きしての公演となりました。出演された垣澤社中の皆様とは、今までの公演活動の展開の中での出会いがあり、それがきっかけとなって今回の公演が実現したと聞いています。公演プログラムによれば、埼玉で活躍している神楽社中に芸の系譜を尋ねると、相模流という言葉がよく聞かれるため、相模の神楽を知ること、埼玉の神楽の系譜について考える上でのヒントにしたいといった意図も主催者側にはあったようです。埼玉から一歩踏み出して、これまでの活動を外からも見てみよう、全体を俯瞰する視点を獲得しようという意気込みと私は理解しました。

それで公演当日、私は初めて垣澤社中の演目を見たのですが、とにかく驚いたというのが正直な感想です。夕公演ではまず神前舞として「奉幣之舞」が舞われました。私はギリギリに会場に駆け込んだこともあって、特に意識することなくこの厳かな舞を拝見しましたが、こうした会場では舞われたことのない貴重な機会に際会していたのだということの後から知りました。しかし、この神前舞が初めに舞われたことで、舞台は神楽が奉納されるにふさわしい特殊な空間になったことが理解でき、その後の演目を見る上での構えができたように思われました。続いて演じられた新作面芝居も新作神楽もとにかく楽しい内容でしたが、やはりこの神前舞があってこそ、より意義を増すものなのかなという気がしました。こうした会場で演じられていても、神楽はやはり文字通り信仰的な要素と不可分なのだろうと思います。驚いたというのは、その新作面芝居と新作神楽を見ての感想です。実は、今度の公

演は新作をお願いするというを以前から聞いてはいたのですが、実際のところ、あまり事態をよく呑み込めていませんでした。「神楽」と「新作」という言葉が素直に結びつかなかったのです。考えてみればこれは硬直した考え方でした。今回の公演を見て、こうした神楽がありうるのだと知り、この分野にあまり知識を持たない私は大変蒙を啓かれる思いがしました。

とくに面芝居は私にとっては初めて接するジャンルでしたが、歌舞伎や能で取り上げられる題材を、神楽面を付けた演者がセリフをしゃべり演じていくというもので、今回初めて見た垣澤社中の新作面芝居「紅葉狩」も、むしろ新鮮な感覚で不思議にすんなりと受け入れられる興味深いものでした。プログラムによれば、面芝居は明治以降、昭和25年ごろまでは埼玉県内でも祭礼の際には随所で必ずといってよい程おこなわれていたとのことで、手近な辞典類にも、江戸末期以降行われ、関東でも里神楽の社中でかつては盛んに演じられていたと出ていました。お面をつけた地歌舞伎という感じなのでしょうか。垣澤社中は埼玉では失われてしまった面芝居を、神奈川県内でも唯一今日に伝えているとのこと。今回の「紅葉狩」は、上品で奥床しい更科姫の所作、そして美しいお姫様が舞を舞っていくうちに、手品のようにお面が早変わりして妖しい雰囲気が変わっていく様が何度か繰り返されるといふ幻惑的で魅力的な演出があり、最後は戸隠山の鬼女が蜘蛛の糸をパッと投げつけたりと派手な動きもあって、登場人物たちのキャラクターに合わせた所作も面白く、とても見ごたえのある楽しめる演目でした。面芝居の存在を知ったことは、従来の神楽社中が地域の人々に受け入れられるためにどのような工夫を凝らしてきたのか、文化財としての民俗芸能イメージにとらわれていた私には、その受容のあり方に改めて気づかされるよい機会となりました。

公演プログラムによれば、今回の公演で演じられた新作物は、「新しい動きがあつてこそこの伝統芸能」(p6)という考え方から、新たな挑戦として演目に取り入れていただいたとのこと。しかし、新作神楽「根国試練」を見てびっくりしたのですが、神楽でまさかカラオケでよく歌われる歌謡曲の一節が流れたり、進行を説明する掛け軸みたいなものが出てきたり、消火器が登場したりというような展開になるとは思いもよりませんでした。そうした演出がごく自然に受け入れられたのも、垣澤社中らしい特徴といえるのかもしれませんが。お話の筋も恋愛に積極的な若い娘(須勢理姫)と、ちょっと頼りなさ気なところもある若者(大穴牟遲命)が、娘の父親(建速須佐之男命)の与える試練を乗り越えていくというもので、娘に振り回される父親や、最後には娘夫婦の幸せを願って二人を見送る姿など、観客受けする要素が練りこまれていて、「紅葉狩」もそうですが、今後は垣澤社中の目玉の演目のひとつとして、それぞれ演じ続けられていけば面白いなと思わせる内容でした。今回上演された面芝居も神楽も、垣澤社中としての新作を実行委員会側から提案したということで、本公演活動が、神楽社中の方々にこうした新しい提案を行うこともあり得るのだと大変新鮮な思いを抱きました。

しかも、そうした新たなチャレンジに真っ先に反応したのは客席だったと思います。観客の受けがとてもよかったですし、最後の演目でお獅子と大黒様と両面が舞い踊り、観客席に降りて練り歩くことでさらに一体感が醸し出され、おめでたい和やかな雰囲気に会場が包まれていくのを感じることができました。公演を見ているうちに、かつて、今とは違って娯

楽の少なかった時代に、村の神社のお祭りで、多くの見物人に囲まれて神楽や面芝居が演じられていた風景が思い浮かぶような気がしてきました。それは私自身がこどもの頃、近所の神社のお祭りで奉納されていたお神楽を、水飴なんかをしゃぶりながら見ていた記憶とも重なって、不意に焼けたソースの匂いが一瞬漂ってきたような錯覚にすらとらわれてしまいました。垣澤社中の演技と演出が、さいたま芸術劇場という空間に、神社のお祭りの境内を現出させてしまったのだといえるのかもしれませんが。しかもそれを楽しく見ているのは海外数十か国からのお客様を含めた観客でした。なんともいえない幸福な時間だったという気がします。幕間のスタッフの一員による「歌謡ショー」(?)も、一瞬何が起こったのかとあっけにとられました。どこか大衆演劇の舞台を思い起こさせる趣向となっていて、面白かったと思います。

今日伝えられている神楽や面芝居も、かつてはさまざまな「新作」として上演されてきたことを思えば、今回見られたような新作に取り組んでいこうとされる姿勢こそ、私たちの基底に流れる大衆的な感性に訴えかけることで、伝統的な民俗芸能が多くの人々に愛され続けていく可能性をさらに広げていくのではないかという気がします。垣澤社中の方々は、こうした神楽や面芝居(垣澤社中の次代を担って行かれる垣澤瑞貴氏は、この両者を分けて考えるのではなく、相模の「新神楽」として一体のものと位置付けておられるということですが)が将来にわたり広く人々の中に根付いたものであり続けるように、さまざまな活動を行っておられると伺っています。これは民俗芸能を受容する新たな形の提案を行ってきた本公演活動の方向性とまさに合致するもので、その意味でも今回の公演は意義深いものだったと思いました。

今回の公演は、昼の部に今日まで伝承されてきた垣澤社中の神楽の演目と解説付き実演があり、夕公演では伝統的な神前舞と新作面芝居に新作神楽、そして寿獅子・大黒・両面が登場する江戸流を取り入れた演目の上演という形で構成されていました。昼公演と夕公演が一体となって、現在の垣澤社中の神楽の世界を、初めての方にもわかりやすく堪能していただくという、大変よく考えられた趣向でした。私も当初は昼公演から通しで見るともりだったのですが、直前に仕事の都合で昼公演を断念せざるを得なくなり、本当に残念な思いをしました。同様の思いを抱かれた方、またやむを得ぬ事情で本公演の観覧をあきらめてしまった方も多かったことと思います。改めて、本公演が費用の関係から平日に公演を打たざるを得ない内部事情をもったいなく感じました。

ところで、本公演活動の今一つの目玉といえ、なんといっても充実したプログラムということになります。公演の準備だけでも大変な作業であるのに、この充実しすぎているという過言ではない分厚いプログラムの執筆、原稿依頼、デザイン、編集が行われているわけで、手に取るたびにその内容の豊富さに毎回驚かされます。特に今回は「垣澤社中の民俗誌」と題した特集が生まれ、垣澤社中の系譜、衣装、囃子、舞・踊りなどが、家元の垣澤勉氏はじめ垣澤瑞貴氏への長時間にわたるインタビュー記事で構成され、大変読み応えのある内容となっていました。家元による社中の来歴に関する貴重な証言に加え、垣澤瑞貴氏へのインタビューは、言語化しにくい神楽の諸相に対する演者による分析的な言及として大変得難いものだったと思います。これは、瑞貴氏が江戸流神楽の世界に「短期留学」したり、日本舞踊や染色まで学んでおられるという「外の世界」からの視点があって、はじめて可能とな

ったものではないかと思われました。垣澤社中の過去と現在、とくに過去の歴史を踏まえて現在まさに生成されつつある神楽の動態を記録した資料として、大変重要な意義のある特集ということができると思います。詳しくは記しませんが、広く物事を考えていく上でも示唆的な記述を随所に読むことができました。また、垣澤社中の面コレクションが一覧表とともにカラー写真で掲載され、さらに従来のプログラムでは紹介されることのなかった神楽社中の方々お一人お一人の神楽歴やコメントのページ、面芝居の公演記録、近年の神社への神楽の奉納記録、神楽衣装と採り物一覧なども収録され、貴重な資料となっています。参考資料として、垣澤社中と同じ相模原の亀山社中の神楽面の写真とリストが掲載されていたのも驚きでした。外国語による本公演の紹介ページは、その作成の手数を考えると、なによりもまず作成者である学生諸君の努力を称えないといけないと思います。このプログラムが単なるプログラムに留まらず、世界へと飛び立っていく翼となるのが、このコーナーだと思います。公演の際に一時的に読まれるだけのものではないということ、ここで強調しておきたいと思います。プログラムは、これらに加え、かつての出演団体・大宮住吉神楽保存会による平成 25 年の宮城県石巻市・雄勝での神楽奉納や、昨年の日本語国際センターでの公演記録と出演団体・梅鉢会の神楽面コレクションの紹介など、近年の公演活動の総括も含めた盛りだくさんの内容でした。コラム・ランナバウト（複数執筆者によるコラムのコーナー）も、それぞれのコラムが神楽という伝統的な民俗芸能が今後も生きていく意味を考える上で深い考察を促す内容となっており、各筆者の方々の記事を大変印象深く読ませていただきました。

さて、今後のこの公演活動がどうなっていくのかということですが、これは私の思い込みかもしれませんが、この公演活動の重要な本質は、常に来年は開催できるかどうかかわからないという立ち位置で進められてきたところにあると感じています。継続を主な目的としてはおらず、一回性に重きを置いているように感じられます。これは毎回学生スタッフが全面的に入れ替わってしまうということが大きいと思うのですが、そこにシニアスタッフ、とくに斉藤修平さんという熱意に満ちた不思議な(?)オルガナイザーが介在し、学生諸君が斉藤さん(学生諸君にとっては大学の斉藤先生という立場にあたるわけですが)を核に集まり、やがて自律的に公演活動を展開していく(あるいは人によっては最後まで自律的には展開できなかったりすることもあるかもしれないのですが)、そこにこのプロジェクトの一種の「危なっかしさ」があり醍醐味(?)があり、一回性の貴重な意義が生じているように思われます。そもそも、スタッフの学生は、里神楽という芸能にはまったく縁もゆかりもなかった人が多いと聞いています。その学生諸君が神楽に興味を覚え、神楽と向き合い、公演を実現していくという過程の中で、私たち観覧者には直接的にはあまり見えない、いろいろな体験や学び、ハプニングやトラブルなどが展開することも含めての公演活動、これがこのプロジェクトの特徴だといってよいでしょう。

本公演の興味の対象は、したがって、舞台上の神楽を鑑賞する以外に、そうした学生諸君が神楽とどう向き合うのか、それが実際の公演にどのように反映されるのか、という点にあるといえると思います。しかし、今回の公演では、会場での学生スタッフの活躍は、行き届いた会場案内、日本語と英語での即妙な司会、会場を沸かせた余興、主催者側の舞台挨拶など大変印象的だったのに、これまでと違い、プログラムには学生諸君の姿があまり出てきて

いませんでした。どうしてなのかは不明ですが、活動記録くらいはあってもよかったのではという気がしました。「若者」と「伝統的なもの」という取り合わせに何らかの新味を見出そうという態度は、ある意味紋切型なのかもしれませんが、それでも学生と神楽、つまり現在の若者と神楽という取り合わせからどんなことが転がり出てくるのか、という展開は、傍で見てみると興味深いことと感じられます。今日、さまざまな娯楽や文化的活動が多様化してネットを通して膨大な情報量が流通している状況の中で、若い人々が神楽に興味を覚える機会は限られていると思われませんが、逆に言えば既成のイメージとは異なる形で、新鮮な神楽受容の形を若い人々が見出していく可能性に対する関心をやはり捨てきれません。学生スタッフがどのような経過をたどって公演当日を迎えたのか、学生実行委員会の主催である以上、これらについてもこれまでのプログラムに見られたような記事がほしかったなと感じた次第です（そうしたらページ数が増えて大変なことになってしまったとは思いますが）。

継続を目的化せず、一回性の奇跡を繰り返すことで今回まで続いてきた本公演活動が、今後どのような展開を迎えるのか、今の段階では知る由もありませんが、その積み重ねが築き上げてきた豊饒な蓄積の意味を、各回公演プログラムの表紙とチケットデザインをまとめたプログラムのページを見ながら改めて考えました。プログラムが立派で部厚すぎるといふ批判の声が予算の観点から常に存在し、私もそのように思うこともありましたが、ズラリと並んだプログラムの表紙を見て、これは偉業だなとつくづく思いました。本当に多くの方々が参画して成し遂げられた奇跡的な偉業。しかしそんな風に簡単にまとめ上げられるだけではなくて、多くの人々がこのプロジェクトを通して何らかの刺激を受けて、何らかの大切な選択をしたであろうこと、その影響は計り知れないと思います。そして、それらとはまた別に、公演プログラムという物理的な形で残された公演記録が、21世紀初頭の日本の民俗芸能を記録した貴重な民俗誌として、思いもよらない利用のされ方をしていくのではないかと想像もしたいところです。なにしろ、日本語国際センターで研修された世界数十か国の日本語教師の方々の手にも、このプログラムがすでに手渡されているのですから。

最後に、この公演の実現に尽力されたすべての方々に、心より感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。本当にお疲れさまでした。そして素晴らしい公演を本当にどうもありがとうございました。